

はじめに

このたび『横浜市歴史博物館調査研究報告』第18号を刊行いたします。

今回は、当館が所蔵する小宮山博史文庫の目録を刊行いたします。小宮山博史氏は、明治から昭和戦前期に至る活字書体の復刻フォント「日本の活字書体名作精選シリーズ」を手掛けた書体設計士であり、長く横浜の佐藤タイポグラフィ研究所の2代所長として、活字書体デザイン、レタリング教育、活字史研究の分野で活動されてきました。そして2016年および2018年の2度にわたり、ご自身で研究・業務のため収集してこられた資料、および佐藤タイポグラフィ研究所初代所長の佐藤敬之輔氏より引き継がれた資料を当館に寄贈されました。

小宮山博史文庫には、国内・国外で刊行された活字見本帳や、活字関係の資料・文献などが含まれており、活字史研究および活字書体研究に欠くことのできない貴重な資料群です。同文庫所収の資料については、今後展示や出版を通じて、広く公開・活用してゆく予定ですが、それに先立ち、まずは目録を刊行いたします。ご活用いただけましたら、幸いです。

なお従来冊子体で刊行して参りました当館の調査研究報告を、今年度よりPDFで公開する方法に変更させていただきます。引き続きご活用いただけましたら幸いです。

最後になりましたが、資料をご寄贈いただきました小宮山博史氏はもとより、本目録の刊行にあたりお力添えをいただきました多くの方々に、厚くお礼申し上げます。

2022年3月31日

横浜市歴史博物館
館長 佐藤 信

目次

はじめに	ii
目次	iii
凡例	iv
解題	vi
A 活字見本帳〔日本語〕	1
B 活字見本帳〔中国語〕	23
C 活字見本帳〔欧米諸語〕	25
D 図書〔日本語〕	39
E 図書〔中国語〕	69
F 図書〔韓国語〕	78
G 図書〔欧米諸語〕	80
H 図録〔日本語〕	87
I 辞書〔日本語〕	95
J 辞書〔中国語〕	97
K 和装本・綴〔日本語〕	100
L 和装本・綴〔中国語〕	106
M 和装本・綴〔韓国語〕	114
N 雑誌〔日本語〕	115
O 雑誌〔中国語〕	126
P 雑誌〔欧米諸語〕	128
Q 新聞	131
R その他〔日本語〕	162
S その他〔中国語〕	165

凡例

1 掲載の内容と分類について

本目録は、横浜市歴史博物館が所蔵する小宮山博史文庫の目録(タイトル数1,352件、総点数2,649点)である。

資料目録は、内容と形態から、活字見本帳・洋装本・和装本・雑誌・新聞・その他の6分類に分け、6分類をさらに言語別に分類した。分類記号として、アルファベットのAからSまでを各分類に付した。A活字見本帳〔日本語〕、B活字見本帳〔中国語〕、C活字見本帳〔欧米諸語〕、D図書〔日本語〕、E図書〔中国語〕、F図書〔韓国語〕、G図書〔欧米諸語〕、H図録〔日本語〕、I辞書〔日本語〕、J辞書〔中国語〕、K和装本・綴〔日本語〕、L和装本・綴〔中国語〕、M和装本・綴〔韓国語〕、N雑誌〔日本語〕、O雑誌〔中国語〕、P雑誌〔欧米諸語〕、Q新聞、Rその他〔日本語〕、Sその他〔中国語〕の19項目である(表1参照)。

表1 小宮山博史文庫分類別点数一覧

種別		分類記号	言語	タイトル数	数量
活字見本帳		A	日本語	203	209
		B	中国語	16	17
		C	欧米諸語	83	86
洋装本	図書	D	日本語	422	485
		E	中国語	145	167
		F	韓国語	20	26
	G	欧米諸語	67	74	
	図録	H	日本語	73	84
	辞書	I	日本語	17	17
J		中国語	21	26	
和装本・綴		K	日本語	63	72
		L	中国語	70	110
		M	韓国語	2	2
雑誌		N	日本語	72	248
		O	中国語	6	29
		P	欧米諸語	9	38
新聞		Q	日本語	18	908
その他		R	日本語	27	33
		S	中国語	18	18
計				1352	2649

2 排列

同一分類の中の排列は、刊行年代順、あるいは成立年代順に排列した。ただしシリーズなど連続して刊行されている資料については、まとまりを重視し小番を用いて整理した。そのため必ずしも編年になっていない箇所がある。また年代が表示されていない資料について、内容などから推定できる場合は、[]内に推定年代を記し、その年代によって排列した。

また整理番号は、分類項目ごとに1番から番号を付した。

3 目録の記述

目録の記述は、分類項目ごとに異なっている。分類項目ごとの記述内容は、次のとおりである。

1. 活字見本帳

整理番号／資料名／著編者／出版地／出版者／刊年／大きさ／頁数／備考

2. 洋装本

整理番号／書名／著編者／出版地／出版者／刊年／頁数／備考

3. 和装本

整理番号／書名／巻号／著編者／出版地／出版者／刊年／冊数／頁数／備考

4. 雑誌

整理番号／誌名／号数／著編者／出版地／出版者／刊年／頁数／備考

5. 新聞

整理番号／紙名／号数／刊行年月／出版地／出版者／頁数／備考

6. その他

整理番号／資料名／刊年／著編者／出版地／出版者／頁数／備考

4 閲覧と資料請求について

小宮山博史文庫の閲覧は、横浜市歴史博物館条例第9条に基づき、特別利用手続きが必要である。利用にあたっては、当館まで直接お問い合わせいただきたい。また特別利用手続きにあたっては、文庫名と分類項目・整理番号を明示し、書類を提出されたい。

謝辞

本目録の刊行は、多くの方々の尽力による。

2016(平成28)年の春から約2年間にわたり、横浜開港資料館に於いて行った、展示開催と寄贈手続きのための目録作成作業では、松村彌栄子・宮坂弥代生・宮内美子・游舒婷の各氏に、2021年度に行った横浜市歴史博物館での目録の点検と追加資料の整理作業については、王赫・鈴木美奈子の両氏に協力を得た。

なお追加資料の整理及び本目録の編集は、2021年度日本科学協会の笹川科学研究助成の成果である。同助成による活動には、小宮山博史(元佐藤タイポグラフィ研究所所長)・内田明(近代活字史研究家)・小谷充(島根大学教授)・小島正彌(ダイナコムウェア(株)相談役)・平湯あつし((株)カイ)の方々の協力を得た。

ご協力をいただいた方々に、記して謝意を表します。

目録の編集は、石崎康子(横浜市歴史博物館主任学芸員)が担当した。

解題

資料の受け入れの経緯と資料目録について

小宮山博史氏(以下敬称略、小宮山)より収集資料の寄贈を受けた経緯を記しておきたい。横浜開港資料館は、2016年、小宮山の所蔵資料を借用し、活字に関する展示開催を計画した。展示の開催を2018年4月からとし、展示を石崎康子(横浜開港資料館主任研究員、当時)が担当することとし、準備を進めるなかで、小宮山より所蔵資料を横浜開港資料館・横浜市歴史博物館等を運営する公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団に寄贈したい旨の申し出があった。そこで、展示開催と寄贈資料の整理とその活用を図るため、横浜活字文化史研究会を立ち上げた。

横浜活字文化史研究会は、横浜開港資料館で行なっていた委託研究会、横浜近現代史研究会の一部会として、2016年度から3年計画で立ち上げられた研究会である。活動の目的は、横浜開港資料館で開催が計画されていた活字に関する企画展示の実施と、横浜市ふるさと歴史財団に寄贈が予定されている小宮山が所蔵する資料の整理方針の策定であった。代表に小宮山博史(佐藤タイポグラフィ研究所代表、当時)を、メンバーに赤波江春奈・浅妻健司・岩井悠・内田明・小谷充・日下潤一・平湯あつし・宮坂弥代生・劉賢国を迎え、活動を始めた。

受け入れることになった資料は、佐藤タイポグラフィ研究所2代所長小宮山が収集した資料群で、2016年9月から12月までの間に3度に分けて横浜開港資料館へ搬入し、資料の整理を開始した。資料整理は、研究会が策定した整理方針に沿って、2016年9月から2018年1月まで2年数か月かけて行われた。同文庫のうち、日本語・欧米諸語の資料については石崎らが担当し、中国語で記された洋装本・和装本については、専門家に資料整理を委託し整理を行ない、仮目録を作成した(第一次仮目録)。

研究会は4回開催され、その成果をもとに、2018年4月26日から同年7月16日まで、横浜開港資料館平成30年度第1回企画展示「金属活字と明治の横浜 小宮山博史コレクションを中心に」展と題し開催した。また資料整理についても、全容を知ることのできる仮目録(第一次仮目録)を作成し、活動を終了した。

一方、展示担当の石崎が2018年4月1日付けで横浜市歴史博物館に異動となり、横浜開港資料館での展示は担当したが、従来担当してきた寄贈予定資料の整理および寄贈手続きを横浜開港資料館で行うことができなくなった。そのため同氏の承諾を得て、資料を横浜市歴史博物館へ搬送し、引き続き石崎が整理を担当することとなった。また同時期に小宮山氏が師の佐藤敬之輔(1912～1979)より引き継ぎ仕事場とされていた佐藤タイポグラフィ研究所の閉所を決められ、閉所に伴い佐藤敬之輔収集の資料など新たな資料の文庫への追加もあった。この度刊行する目録は、第一次仮目録に追加資料を加えたものである。

資料目録の分類方法については、凡例を参照されたい。

活字見本帳について

資料目録は、この文庫の一番の目玉である「活字見本帳」を分類項目の一つに設定し、目録の最初に配した。

活字と活字見本帳について述べておきたい。

活字とは、文字を同一の字形で繰り返し表現するものをいう。一般に活字というと金属活字をイメージするが、金属活字だけではなく、写植書体やデジタルフォントなど、文字を同一の字形で繰り返し表現するものを総称して活字とすることができる。

活字には大きさの別があり、欧米で用いられるポイント制と東アジアで用いられる号数制があるが、日本では明治半ばからそれら2種の大きさを示すシステムが二本立てで用いられている。

また活字には書体の別もある。書体とは、ある一貫したデザイン方針で作られた文字の集まりを指し、明朝体・ゴシック体・教科書体など様々な書体がある。

そして活字見本帳とは、活字販売会社が印刷業者に向け活字を販売する際に、販売促進のため発行する、活字の見本と注文書を兼ねた印刷物で、冊子体のもの、1枚物、バインダー式のものなど刊行の形態は様々である。さらに活字見本帳には、活字販売会社が所有する総ての活字書体を少ない文字で見せる総合見本帳と、ある一定のサイズの総ての文字を収録した総数見本帳の二つがある。金属活字の時代は、総合見本帳と総数見本帳の二種が発行されていたが、写植書体・デジタルフォントでは総合見本帳の発行が中心となっている。また活字見本帳は、活字の大きさ別、あるいは書体別に自社活字の見本が印刷されるのが一般的である。

活字見本帳は、様々な活字製造会社や販売会社、印刷会社、出版社(出版者)が作成配布したが、基本的に活字の注文を取るためのものであり、新しい活字見本帳が提供されると古い見本帳は不要となった。また金属活字から写植やデジタルへと技術革新があれば、以前の技術で作られた活字見本帳も不要となり、保存されることも多くはなかった。そのため、活字見本帳が集められ保管されることは殆んどなく、活字見本帳のコレクションは極めて珍しい。

明治初頭、長崎で本木昌造がウィリアム・ギャンブルから印刷技術を学び、明治5(1872)年、国産近代活字の最初期の活字見本「崎陽新塾製活字目録」が『新聞雑誌』第66号に掲載されて以来、どれほどの活字見本帳が刊行されたかについては、所在調査も行われておらず、不明である。そして国内で活字見本帳の原物を集めた資料群として知られているのは、印刷図書館および印刷博物館所蔵の活字見本帳類、桑山書体デザイン室所蔵のもの、そしてここで取り上げる小宮山博史文庫所収の活字見本帳類である。

活字見本帳より分かること

日本語の活字に関し、個別の書体についての言及は多くあるが、書体の変遷についての言及は少ない。欧米と異なり、日本では活字書体の「型」を制作した人物の名が見本帳等に記載されることは極めて稀であった。また活字サイズや書体のバリエーションを増やしていく過程、あるいは特定サイズ・書体の活字字形を更新した時期などについても、記録が残されることはほぼ無く、業界紙誌などの同時代資料にも後年編纂された社史類にも明確な記録は乏しい。そのため、書体の変遷を明らかにするためには、残された活字見本帳の内容をたどっていく必要がある。一方で、日本語の活字の変遷についての研究が進められてこなかった原因の一つには、書体の変遷を明らかにする材料となる、活字見本帳が整理・公開されてこなかったことにあると思われる。

博物館が所蔵する活字関係資料の利用方法という点、展示への出陳が一般的であるが、ここでは当館が所蔵する資料の目録を公開することで、広く資料の所在を公開し、利用を促したい。そして前述したように、活字書体の多くは、設計の意図といった事柄が記録されることのないまま、各々の世代の技術的な制約と環境、時代の精神を意識的・無意識的に背負って生み出されてきた。活字見本帳の整理と公開を行うことで、先人の歩みと総体としての多様性を示し、変革され続けているデジタル技術環境に対応する新たな書体へのヒントを示すものとなると思う。

そして活字見本帳の公開は、文字愛好家・活字研究者・書体設計士のみならず、文字を扱う多くのデザイナーにとっても有意義であると思う。

本目録では、活字見本帳のもつ個別の情報を、出来るだけ多く提供するように努めた。多くの方々に利用していただけると幸いである。